

モード Mode Mode は語る

中野 香織

官能の靴 思わずため息

マ
ノ
ロ
・
ブ
ラ
ニ
ク



(とりこ)にするデザイナーの素顔に迫るドキュメンタリー映画「マノロ・ブラニク トカゲに靴を作った少年」が公開される。

スペイン領カナリア諸島での幼少時にチョコレートでトカゲのために靴を作って遊んでいた少年は、独学で靴づくりを学び、1971年

にデビューしたあとブームを起し、各国から数々の賞を受賞するばかりか大英帝国勲章名誉コマンドーまで受勲。母国スペインでは「画家のピカソ、映画監督のペドロ・アルモドバル、そしてマノロ・ブラニク」と並び称せられるほどの地位を築く。その素顔が手間ひまをかけた取材で明らかにされていくが、強く印象を残すのは、セクシーで都会的な靴のイメージとは対極にあるマノロの生活や仕事ぶりである。

華やかなスターに囲まれる人気者でありながら、他人との同居ができず、孤独を好む。どんなに売れても

大量生産の波には乗らず、自ら工房で木型を削る。足の指の谷間や甲をなまめかしく見せる官能的な靴を作りながら、自らは性的な快楽とは距離を置く。都会で輝く靴を作りながら、インスピレーションは自ら手入れする庭や自然に求める。自然のなかでの禁欲的で孤独な仕事、モードの最先端で求められ続ける官能的な靴を生むという逆説が心をとらえるのだ。

そんなマノロの靴を履いてみたいと試みるが、実は木型がきゃしゃすぎて私の足には無理。価格も高い。世界中で「マノロ」とため息まじりに発音されることが多い靴だが、そのため息のなかには、「履けない」絶望も少し、混じっているのかもしれない。(服飾史家)

浮沈の激しいモード界で、半世紀近く、別格の天才として君臨するデザイナーがいる。米「ヴォーグ」誌編集長のアナ・ウィンターが「もう他の人の靴は履かない。見もしない」と絶賛し、映画監督のソフィア・ Coppolaが「マリー・アントワネット」製作の際に18世紀のフランス王妃にふさわしい靴としてデザインを依頼。さらに故ダイアナ妃がここの一番の場面で自信をもちたいときに頼みの綱とした靴デザイナー、マノロ・ブラニクである。

マノロの靴とともに埋葬してほしいと願う女性がいるほど、女性を虜